

# ながのけん 埋蔵文化財センター速報

平成14年8月31日 発行

## 各地で新発見

6月下旬からの猛暑、酷暑。県内各所で最高気温、連続真夏日の新記録を樹立した今年。まだまだ残暑厳しい遺跡では、地面からの照り返しにも耐えながらの調査が続いています。

調査開始から5ヶ月が過ぎて、各遺跡から調査成果が伝えられてきました。そのなかには予想を超えるような、新発見の遺構や遺物の報告もあります。調査の様子を北から見ていきましょう。

信濃町の仲町遺跡は7月で調査が終了し、新たに旧石器時代の環状ブロック群が見つかりました。

→【詳しくは4ページ】

豊田村の千田遺跡では自然地形を利用した縄文時代中期の土器や石器などの廃棄場所が見つかり、大量の遺物が出土しています。今後、遺物に伴う遺構の発見が待たれます。

更埴市東中曽根遺跡・西中曽根遺跡では、弥生時代末から古墳時代(5世紀代)の集落が見つっています。同じ更埴市の東条遺跡では8~9世紀を主体とした古代の集落が見つかり、竪穴住居跡11軒のほか、大量の土器が見つっています。

上山田町力石条里遺跡群では、遺跡名の条里制水田の時期をはるかに遡る、弥生時代の前期末から中期初頭の再葬墓群が新発見されました。

→【詳しくは3ページ】

小諸市の鎌田原遺跡では佐久地方初の4世紀末(古墳時代)の集落跡が見つかりました。

→【詳しくは2ページ】

同じ小諸市の野火附城跡では中世の城跡の調査を継続中で、土塁や堀に伴って竪穴建物跡や掘立柱建物跡などの存在が明らかになってきています。

昨年来、旧石器時代の新発見の資料として注目されている飯田市の竹佐中原遺跡も調査を継続しています。昨年石器の見つかった台地全体に調査範囲を広げて、石器の発見に努めています。この夏にもまた新たな石器が見つってきています。



図1 現在調査・整理の行なわれている遺跡

遺跡名	所在地	主な時代	状況
1 仲町遺跡	信濃町野尻	旧石器、~中近世	調査終了、報告書作成
2 千田遺跡	豊田村豊津	縄文時代中期	調査中
3 東条遺跡	更埴市八幡	奈良・平安時代	調査中
4 東中曽根遺跡	更埴市八幡	弥生時代	調査中
5 西中曽根遺跡	更埴市八幡	弥生・古墳時代	調査中
6 力石条里遺跡群	上山田町薬師堂	弥生時代~	調査中
7 まねき・肩平遺跡	大町市常磐	縄文時代?	調査終了
8 山の神遺跡	大町市常磐	縄文時代早期	報告書作成
9 鎌田原遺跡	小諸市御影新田	古墳時代	調査中
10 野火附城跡	小諸市御影新田	中世	調査中
11 聖石・長峯遺跡	茅野市北山	縄文時代中後期	報告書作成
12 箕輪遺跡群	箕輪町木下	弥生時代~中近世	報告書作成
13 竹佐中原遺跡	飯田市山本	旧石器時代	調査中

# 遺跡ニュース

## 佐久地方初の 4世紀末の集落遺跡

小諸市 鎌田原遺跡 かまたはら

所在地：小諸市御影新田 214・215

立地：浅間山西南麓湧玉川左岸の台地（いわゆる田切地形の台地上）



写真1 古墳時代前期末の住居跡（5号住）

上信越自動車道から分かれて山梨県を經由し、静岡県までを結ぶ中部横断自動車道建設に伴う発掘調査が今年度から本格的にはじまっています。

今年度は上信越自動車道とのジャンクション周辺の3遺跡の調査を予定しています。現在は古墳時代前期の鎌田原遺跡と中世の野火附城跡の調査を同時に進めています。ここでは鎌田原遺跡で見つかった古墳時代前期の集落跡を紹介しましょう。

平成13年から調査は2年目となり、調査対象面積は9800㎡あります。現在調査は大詰めを迎え、古墳時代の竪穴住居跡が10軒、時期不明の土坑約10基が発見されています。細かな時期で見ると4世紀中葉が1軒、4世紀末葉が7軒、6世紀代と思われるものが2軒となります。



写真2 5号住の貯蔵穴内の土器出土状況

今まで佐久地方でははっきりと4世紀末の時期といえる竪穴住居跡はみつかっていませんでした。ところが今回発見された7軒は、出土した土器の年代によりその時期であることがはっきりしています。今回の調査資料は、今後の研究に貴重な資料になるものと期待されます。

写真にある5号住居跡は4世紀末の時期に当たります。一辺5m程のやや横に長い竪穴住居跡で（写真1）、住居内に設けられた貯蔵用と思われる穴から高坏と小型丸底土器と一緒に見つかりました（写真2）。

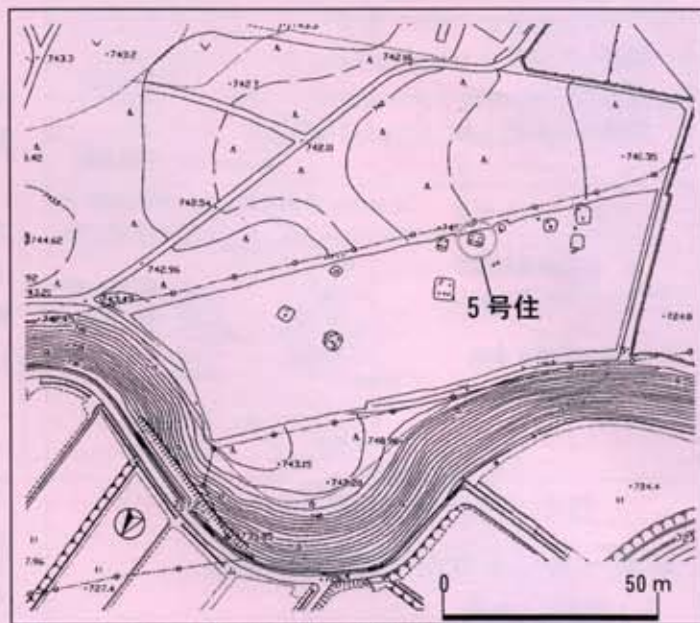
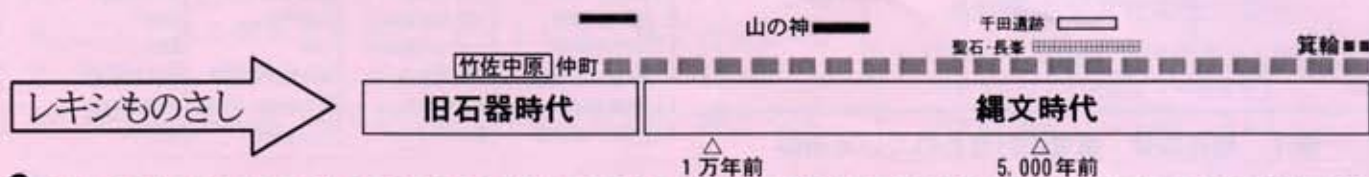


図2 鎌田原遺跡全体図（1：2500）



墓制研究に新資料

# 弥生時代の墓群発見

大規模な弥生時代の再葬墓群か！

## 上山田町 力石条里遺跡群



所在地：更級郡上山田町上山田  
宇薬師堂ほか

立地：千曲川右岸の沖積地

県道力石バイパス建設に伴い発掘調査を開始した力石条里遺跡群で、

弥生時代前期末から中期初頭の再葬墓群が発見されました。

再葬とは、いったん葬った遺体が白骨化した後、再び埋葬しなおすことです。特に東日本の弥生時代の前半に盛んに行われ、壺棺再葬墓(つぼかんさいそうぼ)と言われる、再葬骨を壺棺に納めて穴に埋葬する例が多く見られます。力石条里遺跡群の例も壺棺再葬墓に当たります。

壺棺再葬墓は遺跡の南にそびえる岩井堂山の裾野から150mほど離れた⑩区で発見されました。

⑩区では、約500㎡ほどの調査区から、直径1m～1.4mの穴が、重複しないで約30基検出されています。このうち2基を調査したところ、どちらにもほぼ完形の壺が一つずつ埋まっていました。

そのうちSK115とした穴から出土した壺からは、焼けた骨片が見つかりました。このような状況から壺棺再葬墓であることがわかりました。

他の穴の細かな調査はこれからですが、本遺跡と同時期の再葬墓群である、ほうろく屋敷遺跡(明科町)、針塚遺跡(松本市)などの例から、他の穴にも壺棺が埋められていて、特に大きな穴には複数の土器と一緒に埋めてあると想定しています。

またSK115の壺は、全面に太い条線(条痕文)のあることが特徴的な水神平(すいじんびら)式土器と分類されるタイプで、東海地方で縄文から弥生時代へと移り変わる時に盛んに作られた土器です。

この壺が再葬墓に利用されていたことは、当時



写真3 壺棺再葬墓(SK115)

の長野県へ東海地方から弥生文化が伝えられて来たことを示す資料でもあります。

このほかに調査区内からは、弥生時代の石鏃や石鍬、黒曜石の原石などが出土しています。墓域になぜこのような石器が出土するのでしょうか。東北地方には墓に石鏃などの石器を副葬する例が有るので、埋葬に関わる遺物であるのかもしれませんが。

また、墓域上面には拳大の円礫が多数分布しており、再葬墓に関わる人為的な配石の可能性が有ります。配石の分布には粗密があり、調査区の中央部で粗く、南北の両端で密に分布していて、もしや環状に配石されているのではないかとの説も飛び出しています。再葬墓群に関わる配石はほうろく屋敷遺跡などにも見られ、当時の墓域の景観を考える上で重要な資料となります。

発掘調査は途中であり、今後再葬墓群の全容が明らかとなってくることでしょう。さらに、このお墓を作った人達のムラや水田の跡が近くに埋まっている可能性もあります。

当分、力石の調査から目が離せません。



写真4 SK115の壺(水神平式土器)



# 新たな環状ブロック群

石器石材の意味するものは？

信濃町 なかまち 仲町遺跡

所在地：上水内郡信濃町野尻

立地：丘陵上の平坦面と低地に向かう斜面

仲町遺跡除雪ステーション地点の発掘調査が7月で終了し、H11年度から実施してきた国道18号野尻バイパス建設に伴う発掘調査が一段落しました。

川久保遺跡、仲町遺跡、照月台遺跡、貫ノ木遺跡の4遺跡では、旧石器時代から近世までの遺構・遺物が多数発掘されました。旧石器時代では、32,000点の石器群が出土しました。

今回は、本年度に調査した仲町遺跡除雪ステーション地点の旧石器時代の成果を紹介します。

除雪ステーション地点では、AT（始良丹沢火山灰）降灰期（約24,500年前）より下層から石器が250点出土しました。石器は直径30m弱の環状に分布しているように見えます。

仲町遺跡では、H13年度に調査したB10区でも直径28mの環状ブロック群が見つっています。そして仲町遺跡の環状ブロック群では黒曜石が少なく、安山岩やチャートといった石材を多く使用していることがわかりました。

信濃町野尻湖遺跡群では、日向林B遺跡、貫ノ木遺跡、大久保南遺跡などで環状ブロック群が発見されていましたが、いずれも黒曜石が多いことが特徴でした。そしてどのブロック群も後期旧石器時代の初め頃に残されたものでした。

**石材の違い** 安山岩やチャートを多く使った仲町遺跡と、黒曜石を主体的に使った日向林B遺跡、貫ノ木遺跡、大久保南遺跡、どちらの環状ブロック群を残した人たちも、台形石器と斧形石器と呼ばれる石器を必ず遺跡に残しています。

なぜ同じような道具を使って生活していた人たちが、異なる石材を使っているのか、大変興味深いところです。

さて、仲町遺跡の環状ブロック群は台形石器18



台形石器 斧形石器

写真5 仲町遺跡除雪地点の石器

点、斧形石器9点、砥石1点を含む石器群ですが、まだ、確実に環状ブロック群であると言い切ることができません。それは調査区が切れ切れであるため、ブロック群の全容がわかりません。またどのブロックが同時期のものであるのか、確定していません。同時期のものが環状に配置してこそ、環状ブロック群ですので、その要件を完全に満たしていないのです。今後の整理作業で、石器の接合作業を経て、同時期のブロックが確定されていきます。もしかしたら、図とは違った形の環状ブロック群が描き出されるかもしれません。

## 用語メモ「環状ブロック群」

考古学では、同時期の石器群が環状に分布する状態を環状ブロック群といい、数世帯が集まって行動した場所であると言われている。多くは関東、中部、東海地方で発見され、大半はATより下層の後期旧石器時代（約3万年前～）の開始期に見られる。石器はだいたい直径20～30mの範囲に分布するが、大きいものは直径50mに達する。

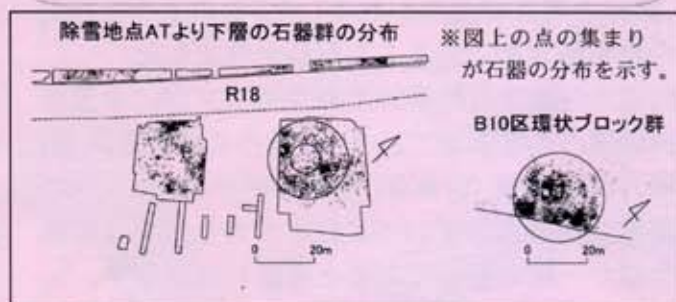


図4 仲町遺跡の環状ブロック群

## 長野県埋蔵文化財センター速報

平成14年第1号

平成14年8月31日

(財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒387-0007 更埴市屋代字清水260-6

Tel 026-274-3891

Fax 026-274-3892

**野帳**おくれればせながら1号の刊行です。この数ヶ月で新知見が求められる調査成果がぞくぞくと伝えられてきました。早、季節は秋。見学会シーズンの到来です。遺跡見学の折、近くの博物館や美術館へ足を伸ばしてみるのもまた一興かと(R)